

翻 訳

NICOLAI DE CUSA DE DATO PATRIS LUMINUM

ニコラウス・クザーヌス もろもろの光の父の贈り物

高 岡 尚

1. この翻訳の底本には, NICOLAI DE CUSA OPERA OMNIA, iussu et auctoritate Academiae Litterarum Heiderbergensis ad codicum fidem edita, IV; OPUSCULA I, edidit Paulus Wilpert, Hamburgi in Aedibus Felicis Meiner 1959 を使用した。訳文の横の欄外にある〔 〕内の数字は, この版の頁を示す。
2. 訳文中に見られる | 印は, この版の頁の「かわりめ」を示す。
3. 訳文の各節のはじめには, 底体と同様に一連番号を付した。
4. 訳文中の () 内の細字は, 訳者が補ったものである。
5. 訳文中の(1)(2)(3)……の番号は, 読解を容易にするために訳者が挿入した。
6. 底本の各節内部においては改行は見られない。訳文における各節内部の改行は読解を容易にするために訳者が行ったものである。
7. 特に注目を要する言葉を示すために, あるいは, 或る言葉のグループを明確にするために「 」を用いた。
8. 書名を示すためには『 』を用いた。
9. 引用された語句や文章を示すためには《 》を用いた。

訳

91 もろもろの光の父の贈り物

〔67〕

父であるあなたには, すでに以前から私の才能の暗さが知られていたにもかかわらず, その中に光を, あなたは巧みな探索によって探し出そうと試みて下さいました。というのは, 薬草を採集しているとき, 《すべての最善な贈り物とすべての完全な賜物は, 上から, もろもろの光の父から来る》《omne datum optimum et omne donum perfectum desursum est a patre luminum》という使徒ヤコボスのテキスト(『ヤコボスの手』一七)が(あなた)心に浮かんだので, あなたは, このテキストの理解に関する私の推測を書くようにと私に要請したからであります。

父よ, あなたはきわめて博学な神学者たちによって記憶され続けて来たものを, (記憶)固く保有しておられますが, 私は聖書のごくわずかの部分を読んだにすぎない, ということを私はよく知っております。それゆえ, もし私があなたの心の誠実さを知らないならば, 私は文字通り赤面するでしょう。しかし, 私はあなたの心の誠実さを知っております。それゆえ, 私の見解であるこの解釈をお受け取り下さってお読み下さい。

92 第一章

私たちを容易な道によって「すべての希求されるもの」omne desideratum へと導くこと, これが聖なる使徒(ヤコ)の意図であったと私は考える。それはこうである。知性的な霊 intellectualis spiritus はすべて, 知ることを欲求 appetere する。なぜなら, 知解すること intelligere が知性の生命 vita intellectus であり, これ(知解)こそがそれ(智)の「希求される存在」esse desideratum だからである。しかるに, 無知な者 ignorans は自らの光 lumen によって英知

の把握 apprehensio sapientiae へと | 上昇することはできない。(無知な者が英知を把握するた) ためには英知の光を必要とする) 〔68〕
 何かを必要としている者 indigens は、自分に欠けているものを必要としているがゆえに、何かを必要としている者は、当然、自分が何かを必要としていることを認識し、自分の必要がそれによって充足されるところのそれに向かって熱心に頼ることになるからである。たしかに、もし英知を必要としている者が、あの方^(神)から——あの方の宝は英知 sapientia の充満である、あの方は宝を与えつくすことによって増加せしめる、あの方の節約は最も寛大な放出である——それを請い求めるならば、彼が英知に到達しないことはありえないであろう。なぜなら、英知は、探し求める者どもの精神に自分自身を注入するからである。これは極めて英知あるフィロンの至高の教えである。彼は、英知を賛美する労作に励むとき、それを探し求める者どもの精神の中に英知が滑り込むことを示す。さて、「請い求める」postulare とは固い信頼によって、すなわち、必らず得られるという疑い無き希望によって求めることである。自分が知らない英知へとひたむきな走行によって進み続ける者を、英知は敬愛される母のように出迎えるであろう。

93 使徒(使)は、細道を照らす光 lumen, 足もとを照らす明かり、「靈魂の存在根拠と生命」ratio et vita animae であるところの英知 sapientia をだれに求めるべきかを示すとき、いっさいの誤謬を排除しようと欲して、《すべての最善な贈り物とすべての完全な賜物は上から来る》と言う。この意味はこうである。もし「存在するところのもの」id quod est すべてが、永久に自分自身とは別なものになりたくないと望むほど、しかも、「自らの本性の制約が許す限りのいちばん善い在り方で」meliori modo, quo hoc suae naturae patitur condicio^(注) 存在したいと望むほど自分が善であると思うならば、自らが「最善なもの」optimum から来ていることを認識する力はすべて、自らが最も善い仕方存在していることを認識する。それゆえ、この力はすべて——自らの存在が消滅することを、あるいは、自らの存在が自らに固有な種 species propria 以外の他の存在へと変化することを、いつも決して欲しないがゆえに——自らの存在が、「万物の上に超え出て完璧な最善性という高みにあることのないような | 他の⁽⁶⁹⁾何か」^(神以外)から自らに与えられたのではない、ということ認識する。すなわち、人間の知性 intellectus humanus は自らの本性 natura が^(神)或るものから——その善性がすべての善いものの上に越え出て至高の地位にあることがないような或るものから——自分に与えられたと信じることはないし、また、「存在するもの」ens はどれも、もし自らの本性が縮減されて創造された善 diminutum et contractum bonum から与えられたとするならば、与えられた本性において静止 quiescere していることがないであろう。しかし、「存在するところのもの」id quod est はすべて、だれよりも優れている最も善い最大の教師から自らの存在 suum esse を獲得したがゆえに、最善なものからの最善な本性としての自らの種的な本性 specifica natura において静止している。それゆえ、「存在するところのもの」すべての本性的な所与はどれも、現に存在している限りの、しかも、最善なものとしての自らの存在に静止しているところのものどもすべての判断 iudicium によれば、最善である。それゆえ、それ^(おのおのの存在者の本性的な所与)は、《上から》、すなわち、万物の最も十全な形成力 sufficientissima virtus formativa omnium であるような芸術と英知 ars atque sapientia を所有する無限な全能 omnipotentia infinita から来る。

94 しかし、与えられた本性がすべて自らの種の可能な完全性の段階 gradus possibilis perfectionis speciei suae に現実に actu 到達するわけではなく、かえって、種の個別的な縮限

individualis contractio speciei は、どれも^(種)可能性の現実化の究極的な完全性 ultima perfectio activitatis potentiae から隔たっていることが認められる——ただし、一人の主われわれのイエス・キリストにおいては別である。それゆえ、(1) 知性の可能性 potentia は知性の創造主ではないところのものすべてを包み囲んでいるがゆえに、知性 intellectus は、その把捉へと現実化されるために^(神以外のものすべてを把捉して自らの可能性の現実化の究極的な完全性に到達するために)、創造者の恩恵の賜物 donum gratiae を必要とする。(2) 理性的な被造物 rationalis creatura はといえば、自らのうちに「理性の識別的な光」 discretivum rationis lumen を所有しているけれども、それ^(理性の識別的な光)は、フクロウの眼のように非常に弱く、この感覚的な身体の中で数多くの影によって暗くされている。それゆえ、理性は神の言葉という霊の息吹き afflatio spiritus によって現実化され、理性の闇 tenebrae rationis が照明 illuminare される。例えば、言葉になった息 spiritus verbalis によって自分を入り込ませる教師の照明された理性という贈り物によって、弟子の理性的な力そのもの vis ipsa rationalis が次第に現実態 actus へと引き出されるとき、弟子は教師の言葉によって照明される。さて、上からの贈り物 donum であるこの現実化する照明 actuans illuminatio はどれもみな、すべての贈り物の父から下降する。父からの贈り物 dona はすべてもろもろの光 lumina であり、「神のもろもろの顕現」 theophaniae なのである。サロモン⁽⁷⁰⁾ は、霊魂の自然本性に従って神から与えられる最善なものを獲得した。しかし、彼の霊魂 anima が他の人の霊魂よりも優れていたのは、この贈り物^(霊魂の自然本性に従って神から与えられる最善なもの)によってではない。むしろ、彼に先立つユダヤ人の王たちすべてを超えて現実的な把捉 actualis apprehensio へと上昇した知性的な力 vis intellectualis を所有する霊魂を彼が獲得したのは、照明 illuminatio という贈り物によってである。しかし、英知 sapientia のこの贈り物^(照)を彼が上から、すなわち、「もろもろの光の父」 pater luminum から請い求めたので、それが彼へと下降したのである。じっさい、われわれは、「もろもろの光の父」 pater luminum から、つまり太陽から与えられた種子の力 virtus が、同じもの^(もろもろの光の父である太陽)から^(光)贈り物が与えられる場合にかぎり現実態 actus へともたらされる、ということを見る。というのは、木が種子という可能態から引き出されるのは、太陽が^(光という)贈る場合に限られるからである。あの力^(木へと成る)が種子に内在することも、太陽の贈り物なのである。

95 それゆえ使徒^(ヤコ)は、(1) 神が悪の原因であると主張した人たちと、(2) あたかも或る人が「恩恵という贈り物」 donum gratiae ないしは「父のひきよせ」 attractio patris なしに自分で英知の把捉 apprehensio sapientiae へと到達することもできるかのように、自らの僭越 praesumptio によって自分を高めた人たちとの、両方の誤謬を取り除こうと欲した。自分の力によって至高なものの似姿 similitudo altissimi へと登ろうと努めた「理性的な分離霊」 rationalis separatus spiritus ルチフェル Lucifer の極めて僭越な罪はこのようなものであったし、また^(案)木の実の感覚的な食事の栄養によって神々の知識の完全性に到達しようと期待した両親^(アダム)の「肉体に合一した理性的な霊」 rationalis incorporatus spiritus の極めて僭越な罪も、このようなものであった。なぜなら、ここで^(『ヤコボスの手紙』一の一七)私たちはこう教えられているからである、すなわち、生きている光 lux viva であり、われわれの霊の希求の栄光に満ちた安らぎであるところの英知 sapientia をわれわれが把捉するというこの現実化 actualitas は、われわれからも、下位の感覚的な生命活動 inferior sensibilis vegetatio からも由来することができず、かえって、もろもろの形相の父でもあり与え主でもある方 pater atque dator formarum から由来する——完成することは彼にのみ属するのであるから——、と。

また彼^(ヤコ)は、「もろもろの光の父」 pater luminum をないがしろにして、ミネルバ Mine-

rva, アポロ Apollo, ユピテル Iupiter および他の神々から助力を請い求めた他の人たちの誤謬をもくつがえす。なぜなら、あらゆる異教徒の | 立場が神々のうちの一なる無限な神だけ (C11) が創造主であると主張するがゆえに、彼 (ヤコブ) は、「完成に導く賜物」perfectivum donum はすべて彼 (一なる神) ひとりから請い求めるべきであって、自らの力のゆえに神化されてはいるけれどもこれら (ユピテル、アポロ) から請い求めるべきではない、ということを示しているからである。なぜなら、万物の父から受け取らなかった何かを自分から所有しえないものども (ミネルバ、ユピテル) は、贈り物を与える能力 donandi facultas を所有していないからである。彼らは自らに固有なものを何も所有していないからである。すべての贈り物は、おのおののものの役割 ministerium によって分有されるけれども、父の贈り物である。存在するすべてのもの omne quod est は彼のものであり、彼から下降しなければならない。

96 それゆえ、英知 sapientia の所有を得たわれわれの取り次ぎ者 (教会博士) はすべて、もろもろの光の父 pater luminum から光 lumen が与えられるように請い求める。彼ら自身が与えるのではなく、贈り主でも贈り物でもある彼 (イェス・キリスト) ille qui est donator et donum だけが与えるのである。このことを使徒 (ヤコブ) が言おうと欲しているのだ、と思われる。彼は、みじんのためらいもない極めて堅固な信仰を伴う絶え間なき祈りへとわれわれを誘って (もろもろの光の父の贈り物を) 確実に得ることを希望させる。われわれの父は《惜しみなく与えるがとがめない》(『ヤコブの手紙』一の一七) からである。使徒のあの命題 (『ヤコブの手紙』一の一七) については、以上で述べ終わったものとしたい。

97 第二章

さて、われわれは、使徒 (ヤコブ) の言葉の中に秘められている驚嘆すべき光 mirabile lumen を更に賛嘆したいものであるが、それ (驚嘆すべき光) 自らがなんらかの仕方でも明らかになるように、私は (使徒ヤコブ) 言葉の本来的な意味 verborum proprietatem を少しくほじり出すことを試みたい。

使徒 (ヤコブ) は《すべての最善な贈り物云々》(『ヤコブの手紙』一の一七) と言っている。それゆえ、どの被造物もなんらかの意味で神であると思われる。その理由はこうである。神だけが最大度に善い者 maxime bonus すなわち最善な者 optimus である。| それゆえ、もし「最善な贈り物」が被造物であるならば、どの被造物も極めて善なものであるがゆえに、どの被造物も「贈られた神」deus datus であると思われる。この理由 (被造物が贈られた神) を述べよう。(1) 何ものも自らの可能態 potentia に下屬しないものを (他者) 与えることはできない。なぜなら、「与えられるところのもの」id quod datur はそれを与えるものの可能態の中に存在しなければならないからである。ところで (最善な) 善いものは、(それと) 善いものの可能態の中に存する。しかし、最善なもの optimum は、それが最善であるがゆえに、一で、単純で、不可分割的 unum, simplex, impartibile である以外の何ものでもない。それゆえ、彼 (最善な) は自分自身以外のものを与えることができない。(それゆえ、どの被造物も「贈られた神」であると思われる。)(2) 最善なものは自分自身を拡散せしめる Optimum est sui ipsius diffusivum が、最善なものは最善なもの以外ではありえないがゆえに (自身) 部分的に partialiter 拡散せしめるのではない。というのは、彼 (最善な) は「存在しうるところのもの」id quod esse potest すべてであるからである。それゆえ、彼 (最善な) 自身の存在 esse は彼 (最善な) 自身の最善性 optimitas と永遠性 aeternitas である。それゆえ、彼 (最善な) は自らを縮減されない仕方でも indiminate 分与 communicare している。(それゆえ、どの被造物も「贈られた神」であると思われる。)

それゆえ、あの同じもの (最善な) が神でも被造物でもある——「贈るもの」dator という在り方に基づけば神であり、「贈られるもの」datum という在り方に基づけば被造物である——と思われる。それゆえ、「在り方」modus の相違に基づいてさまざまな名称を取る「一なるも

の」 unum だけが存在することになろう。したがって、あのもの (最善な) 自体が、「贈るもの」という在り方に基づけば「永遠なもの」であり、「贈られるもの」という在り方に基づけば「時間的なもの」であることになろうし、また、あのもの (最善な) 自体が、「贈るもの」という在り方に基づけば「造るもの」 factor であり、「贈られるもの」という在り方に基づけば「造られるもの」 factum であることになろう。他のもの (「存在するもの」等々) についても同様である。

98 疑いなくこの言い方 (「贈るもの」 dator と「贈られるもの」 datum という言い方) は厳密性を欠いているが、われわれは (この言い方の中に) 真理の知解を求めよう。

哲学者たちは「モノ res に存在を与える形相が存在する」 forma est, quae dat esse rei と言う。| この言表は厳密性を欠いている。この理由はこうである。「どのモノ res も形相によ (73) ったのみ存在するがゆえに、形相が存在 esse を与える相手方のモノは存在していない。それゆえ、形相から存在を受け取るモノは存在していない。(もし、そのようなモノが) それは、存在する以前に存在しているはずである」。にもかかわらず、形相はモノに存在を与える。その意味は、形相とは「存在しているすべてのモノにおける存在自体」 ipsum esse in omni re quae est であり、したがって、モノに与えられる存在は (き) 存在を与える形相自体であることになる、ということである。さて、神は「存在の絶対的な形相」 absoluta essendi forma である。これは、万物のどの存在も父から贈られたものである、という個所 (『ヤコブの手紙』一の一七) の使徒 (ヤコブ) の教説である。しかるに、形相は存在を与える。それゆえ、神は、万物に存在を与えるがゆえに「存在の普遍的な形相」 universalis essendi forma である。ところで、形相は個別のおのおののモノに存在を与えるがゆえに、つまり、形相はモノの存在自体 ipsum esse rei であるがゆえに、存在自体を与える神が「諸形相の与え主」 dator formarum と多くの人たちによって正当に名付けられている。それゆえ、神は土、水、空気、エーテルあるいは何であれ他のおのおののモノの形相ではなく、土あるいは空気の形相の「絶対的な形相」 absoluta forma である。それゆえ、土は神あるいは他の何かではなくて、自らの形相によって per formam suam 土であり、空気は自らの形相によって空気であり、エーテルは自らの形相によってエーテルであり、人間は自らの形相によって人間であり、どのモノ res も同様である。なぜなら、どのもの res の形相も「普遍的な形相からの下降」 descensus a forma universali であるので、土の形相は自らの (土) 形相であって他のモノの形相ではないことになるからであり、他のモノども (空気、エーテル) についても同様であるからである。

99 このことを使徒 (ヤコブ) は《最善な贈り物が下降する》と言うことによって、われわれに驚嘆すべき精緻さをもって示している。彼 (ヤコブ) は次のように語っているかのようである。すなわち、「諸形相の与え主 (最善な) | は自分自身とは別なものを与えるのではない。かえって、彼 (74) の贈り物は最善なものであり、彼の絶対的で普遍的に最大な最善性自体である。しかし、この贈り物の受容は下降的に descensive なされるがゆえに、この贈り物は、与えられるとおりに受容されることはありえない」と。それゆえ、無限なものは有限な仕方を受容され、普遍的なものは個別の仕方、絶対的なものは縮限された仕方 contracte 受容される。しかるに、このような受容 receptio は「自らを伝達するもの」 se communicans の真理からの落下であるがゆえに、(「自らを伝達するもの」) 類似と像 similitudo et imago へと向かい、ついに (真ら) 与え主の「真の姿」 veritas ではなく似像 similitudo となる。なぜなら、与え主の真の姿は、他のものにおいては他の仕方 aliter しか受容されえないからである。事実、あなたの顔は、自らの表面の有様の相等性 aequalitas を多重化 multiplicare して鏡においてさまざまに——受容能力

receptio である鏡がさまざまであるのに応じてさまざまに——受容されるけれども、すなわち、或る鏡においては、その鏡の受容能力がよりはっきりしているがゆえによりはっきりと受容され、他の鏡においてはよりぼんやりと受容されるけれども、しかし、どの鏡においても顔自体があるがままに *uti est* 受容されることはない。というのは、それ^(眼)は、他のものにおいては他の仕方^(眼)で受容されねばならぬからである。一つの鏡だけがシミをもたない、それは神そのものである。それにおいて顔自体があるがままに受容される。なぜなら、その鏡^(眼)は存在するところの或るものとは別なものではなく、かえって、存在するところのものすべてにおける「存在するというまことにそのこと」*id ipsum quod est* であるからである。なぜなら、神は「存在の普遍的な形相」*universalis essendi forma* であるからである。

100 さまざまな例が、さきに言われたことを理解するためにわれわれを助ける。

光 *lumen* はすべての可視的な存在の、すなわち、すべての色の或る普遍的な形相である。なぜなら、色は光が縮限されて受容されることであり *color est contracta receptio lucis*, ^(その)光 *lux* は事物に混じり合うことなく、むしろ、下降の或る段階に基づいて下降的に *descensive* 受容されるからである。透明体における光の限界づけが色であり *terminatio lucis in perspicuo est color*, それは^(限界)或る仕方においては赤であり、|^(限界)他の仕方においては青⁽⁷⁵⁾である。そして色の存在はすべて下降する光 *lux* によって与えられるので、その結果、光 *lux* は、——自らの善性から自らを純粹に拡散せしめる *puriter diffundere* 本性をもつがゆえに——「すべての色において存在するところのもの」*id quod est in omnibus coloribus* すべてであることになる。光は自らを純粹に伝達することによって与えるにもかかわらず、それがさまざまに下降的に受容されることから、もろもろの色という多様性が生じる。色は光 *lux* ではないが、光 *lux* の形相がもろもろの色の形相に対して比をもつという或る類似によって、このように^(下降)縮限されて *contracte* 受容される光 *lux* なのである。同様に、無限な光 *lux* である神は、「存在の普遍的な形相」としてもろもろの被造物の形相に対して比をもっている。同様に、ソクラテスの「実体的な形相」*forma substantialis* は一な、単純な、非部分的な、全体においても部分においても全的な形相であり、これによってソクラテスとソクラテスに属するものすべてが存在する。じっさい、ソクラテスの手がソクラテス個人のものであって他の人のものではないということを、ソクラテスの手はソクラテスの^(実体的)形相から所有する。しかし、^(手)手自体は、ソクラテスの^(実体的)形相をあ^(実体的)の単純性と普遍性において——ソクラテスの^(実体的)形相がそれによって存在するところの単純性と普遍性において——受容するのではなく、個別的な下降において、すなわち、これこれの具体的な構成部分として *ut membrum tale* 受容するがゆえに、ソクラテスの手はソクラテスではない。他の構成部分についても同様である。

101 われわれの靈魂 *anima* は、「識別のための普遍的な識別力」*vis discretiva universalis ad discernendum* であり、一で、単純で、全体においてもおのおのの器官においても全的である。したがって、眼に存在する識別力はすべて、自分自身を視覚に与える靈魂から与えられることになる。しかし、眼が靈魂を受容するのは^(靈魂)下降 *descensus* が生じている場合に限られる。なぜなら眼は普遍的な識別力 *virtus universalis discretiva* である限りの靈魂を受容しないからである。それゆえ、眼は、|聞かれうるものどもと味合わせうるものどもとを識別 *discernere* ⁽⁷⁶⁾しないが、可視的なものどもを識別するために、普遍的な^(靈魂)力を縮限された仕方^(眼)で *contracte* 受容する。眼において識別をはたらくものがすべて靈魂の贈り物 *datum animae* であるとし

ても、眼は、見ている靈魂ないしは識別している靈魂ではない。聴覚や他の感覚についても同様である。

「実体的な形相」forma substantialis は「実体的な存在」esse substantiale を普遍的に与える。この（普遍的に与えら
れる実体的な）存在は（^{「es」}において）下降的に descensive すなわち、量的に、質的に、関係的に、能動的に、受動的に、位置的に *situationaliter*, 所有態的に *habitualiter*, 場所的に、および、時間的に受容される。つまり、（^{「実体的な存在」という}）単純な一性 *unitas simplex* は（^{「九つ」}）九つの仕方で受容される。その結果、（^{「実体的な形相」が}
受容される仕方は）このように全部が「十」と数えられる。しかし、それ（^{「実体的な形相」}）が量によって純粋に実体的にではなく下降的に、このような（^{「量」}）縮限 *contractio* によって受容されるがゆえに、量は実体ではない——ただし、量の存在すべてが実体から与えられたものであり、その結果、量において存在するところのもの *id, quod est in quantitate* すべてが実体とは別なものではないことになるけれども、そして、量は実体の量であるけれども。他の付帯性ども *accidentia* についても同様である。

102 これらによってわれわれの知性 *intellectus* は助けられ、使徒（ヤコブ）のあの言葉（『ヤコブの手紙』一の一七）の解説にわずかでも入り込むことができるはずである。したがって、われわれの知性は、どのような仕方で神がすべての形相の「存在の普遍的な形相」*universalis essendi forma* であるかを、すなわち、これ（^{「存在の普遍」}
的形相）を下降において種的な諸形相 *formae specificae* が、普遍的に絶対的に、それ（^{「種的な形相」}
的形相）が存在するままに、それが自らを与えるがままに受容するのではなく、種的な縮限 *contractio specifica* によって受容する、ということを知ることができる。例えば、天使性 *angeleitas* は、天使性と呼ばれる下降に基づいて存在の普遍的な形相を受容する。人間性は、人間性と呼ばれる下降に基づいて存在の普遍的な形相を縮限 *contrahere* する。獅子性 *leoninitas* は、（^{「獅子性」と}
呼ばれる）下降に基づいて絶対的な形相 *forma absoluta* を分有 *participare* する。このように神は万物のうちでは万物であるけれども、しかし、人間性は神ではない。⁽¹⁷⁷⁾——ただし、神はすべてのモノ *res* の名称と呼ばれ、すべてのモノ *res* は神の名称と呼ばれる、というヘルメス・トリスメギストスの言葉が健全な知性によって認められうるけれども、したがって、人間は「人間になった神」*deus humanatus* と、そして、この世界は、プラトンも欲したように「可感的な神」*deus sensibilis* と呼ばれうることになるけれども。

103 彼（^{「神」}）は、万物を自分自身のために造った自分の仕事の目的であるがゆえに、可感的な世界が彼自身のために存在するようにと自分自身を可感的な世界として与えたのであり、その結果、可感的な段階へと発散 *divergere* する・彼の下降的な受容は、彼の善性に可感的に到達することとなり、無限な光 *lux infinita* は、可感的な諸事物には可感的な仕方で輝き出ることとなり、同様に、生命あるものどもには生命的な仕方で、理性あるものどもには理性的な仕方で、知性あるものどもには知性的な仕方で輝き出ることとなる。このことについては、以上で述べ終わったものとしたい。

104 第三章

さらに、「被造物はすべて、贈り主（^{「神」}）のもとでは永遠であり、しかも、永遠性自体である」*omnis creatura in datore aeterna atque ipsa aeternitas est* と使徒（ヤコブ）がいかに用心深く言表したかに私は気付いた。

贈り主の全能は永遠性自体と一致しており、全能な者はいつでも贈ることができたのである。それゆえ、すべての贈り物は父のもとでは永遠性において存在していたのであるが、受容

されるとき、父から下降したのである。すなわち、贈り主はつねにそして永遠に^(贈り)与えたのであるが、しかし、^(贈り物)永遠性からの下降においてのみ受容されたのである。しかし、このような下降は、| 始めのある持続へと永遠性を縮限すること *contractio aeternitatis in* ⁽⁷⁷³⁾ *durationem initium habentem* である。

105 もし永遠な理性^(神) *aeterna ratio* から諸事物の多数性 *pluralitas rerum* がどのような仕方で下降するかが考察されるならば、このことは容易に把握される。ところで、多数性とは数 *numerus* のことである。そして、^(人間)理性が推理すること、ないしは、数えること、それは正に創造主^(永遠な)が創造することである。しかるに、^(人間)理性から下降する数は始め *principium* つまり一性 *unitas* をもっている。しかし、数は終り *finis* をもたない。なぜなら、それを超えて与えられうる他の数が存在しえないようなそのような数は与えられえないからである。それゆえ、(1) 数は「始められた永遠性」*aeternitas principiata* であり、(2) 絶対的な理性 *ratio absoluta* は「絶対的な永遠性」*aeternitas absoluta* である。なぜなら⁽¹¹⁾理性が^(数)原因であるからであり、⁽¹²⁾絶対的な理性は、絶対的な原因 *causa absoluta* であるがゆえに、自らが「始められたもの」*principiata* であること、すなわち、自らが「原因されたもの」*causata* であることを拒否するからである。それゆえ、被造物は、その中に自分がつねに *semper* 存在していたところのその永遠性から下降したのである。

106 さて、贈られた永遠性は縮限された仕方で *contracte* のみ受容されたがゆえに、「始めのない永遠性」*aeternitas sine principio* が「始められたという仕方で」*principiative* 受け入れられて存在することになる。それゆえ、彼^(贈り主)のもとで永遠性が世界の存在すべてである限りにおいては、世界 *mundus* は始めをもたない。しかし、永遠性は、世界が下降するとき「始められたという仕方で」*principiative* しか受容されなかったがゆえに、世界は絶対的な永遠性ではなく、「始められたという仕方で縮限された永遠性」*aeternitas principiative contracta* である。それゆえ、世界の永遠性は始められたのであり、永遠な世界は造られたのである。父のもとで永遠である世界と、父からの下降によって造られた世界とは別々であるのではなく、かえって、始めのないあの同じ世界は、「始められたという仕方で下降によって自らの固有の存在において受容された世界」でもあり、後者はまた、「父のもとで変転的 *transmutabilis* であるのではなくて永続的な安定性 *perpetua stabilitas* によってあり、しかも、影のうつろい *vicissitudo obumbrationis* の全くない最高の明るさにあるあの同じ世界」——「恒存する父 *pater persistens* でもある世界」——でもある。だが、それ^(父のもとで)は、父から下降して固有の存在において受容された限りにおいては、変転的であり、影のうつろいのように不安定に波打つ。この世界はいわば「影のうつろいのように変転する神」*deus transmutabilis in vicissitudine obumbrationis* であり、「不可変転的であり影のうつろいの全くない世界」は、いわば永遠な神である。

107 これらは、神と世界とについて把握される知解内容 *intelligentia* を伝達する仕方におい⁽⁷⁹⁾ては厳密性に近づいてはいるが、完璧な厳密性を欠く知性的な話し方である。しかし、彼^(神)はすべての肯定と否定とを越えて、すべての措定 *positio* と廃棄 *abnegatio* とを越えて、すべての対立、変転 *transmutatio* および非変転を越えて、知解 *intelligentia* には近付きえない光 *lux* の中に住むということを肯定する人は、「言表されえない神」*deus ineffabilis* について、いっそう厳密に語るであろう。このことに関しては他の個所でいっそう詳しく述べられ

る。さて、言表されえない神についてこのように語ることは、すべての言葉 *loquela* と沈黙 *silentium* とを超えるところ——沈黙することが語ることであるところ(近世のキリスト)——に存在する言葉を使用して語ることであるがゆえに、その言表はこの世界 *hic mundus* についてではなく永遠の王国 *regnum aeternum* に属する。それゆえ、知解内容をわれわれがこの世界において伝達するとき、使徒(使徒)は変転と影のうつろいが父である神に合致することを否定する。なぜなら、彼(父である神)は永遠な光 *aeternum lumen* であり、そこにはどんな闇も存しないからである。

108 第四章

さて、使徒(使徒)のあの叙述、すなわち、「神はもろもろの光の父 *pater luminum* である」と彼が述べている個所を考慮する仕事は、なおわれわれに残されている。

使徒(使徒)は、「神は光 *lumen* である」と言わないで、「(神)もろもろの光の父 *pater luminum* である」と言う。また、「もろもろの光の父である」と彼が主張するその神は闇であるとも言わない。むしろ、神は(光である神)もろもろの光の源泉 *fons luminum* なのである。

われわれは、われわれの認識 *notitia* に到達するものどもが存在することを肯定する。しかし、どんな仕方によってもわれわれに現われないものどもが存在することを、われわれは把握することができない。それゆえ、万物は「現われ」ないしは「或る光」*apparitiones sive lumina quaedam* である。しかるに、もろもろの光の父ないしは源泉 *pater et fons luminum* は一であるがゆえに、万物は一なる神のもろもろの現われである *omnia sunt apparitiones unius dei*。神は一であるけれども、多様性において in varietateしか現われることができないのである。無限な力 virtus infinita が多様性においてとは別な仕方で現われることがどうしてできるであろうか。

109 学識者は把握能力のある *adeptus potens* 実践的な知性を所有しているが、それ(知)は多くの概念 *rationes* の多様性においてしか現われることができない。それゆえ、「もろもろの光の父である知性」*intellectus, qui est pater luminum* から推論的な理性的なさまざまな光 *lumina rationalia syllogistica* が下降し、その結果、彼(父である知性の)が次のような仕方ですらをあらわにすることになる。(1) それ(もろもろの光の父である知性の)は「数の単純な根源である一性」であり、最大で把握されえない力に属する。この力の現われ *apparitio* は、この力から下降するもろもろの数の多様性においてしか示されない。(2) それ(父である知性の)は「最も単純な点」という把握されえない力である。この力は、最も単純な点自体から、いわばさまざまな光 *lumina varia* として下降するもろもろの量において *in quantitibus* のみ知られる。(3) それ(父である知性の)は「最も単純な現在性」*praesentialitas simplicissima* という把握されえない力である。この力は、時間的な継起において *in temporali successione* のみ把握されうる。

しかるに、(1) 万物は(おのおのの数の造物はすべて)、数に基づけば、一性において把握されうる。(2) 万物は(おのおのの被造物)、量に基づけば、点において把握されうる。(3) 万物は、時間的な継起に基づけば、現在性という今において *in nunc praesentiae* 把握されうる。(4) 万物は、「それらが現に存在すること」「それらがすでに存在したこと」「それらが未来に存在しうること」これらすべてに基づけば、全能という無限な力において把握される。なぜなら、われわれの神は、全くの現実態における絶対的に無限な力であり、この力は、善性という本性によって自らをあらわにしようと欲する限り、さまざまな光 *varia lumina* を——神の顕現 *theophaniae* とよばれる光を——自分から下降させるからである。

それゆえ、これらもろもろの光 *lumina* すべてにおいて神は、自らの栄光という光 *lumen gloriae* の富を知らせるのである。

110 しかし、善性という原因だけを所有してこのように《随意に》《*voluntarie*》^{『ヤコボスの手』(紙)一の一八}行なわれるところのこの「生成」*generatio* は、《真理の言葉》《*verbum veritatis*》^{同上}において行なわれる。この「真理の言葉」すなわち「理性ないしは芸術」*ratio seu ars* は、絶対的なものである、すなわち、すべての理性の光 *lumen omnis rationis* とわれわれの理性である。「言葉」でもあり「長子」*filius primogenitus* でもあり父の最高の現われ *suprema apparitio patris* でもあるこの「光」*lumen* において「もろもろの光の父」*pater luminum* は、下降す⁽⁸¹⁾るすべての現われを《随意に生んだ》^{『ヤコボスの手』(紙)二の一八}。このことは、現われるすべての光 *omnia apparentialia lumina* が、もろもろの現われの最高の力とその合一の強さに包含される *complicari* ためであった、例えば、(1) 抽象的な「子であること」*filiatio* に、どんな仕方で展開されえようとも「子であること」のすべてが包含されるように、(2) 最も普遍的な芸術に、芸術によってどれほどまでに展開されえようとも「芸術であること」のすべてが包含されるように、(3) 絶対的な理性ないしは識別 *ratio sive discretio* に、どんな仕方で識別する光 *lumen discernens* であろうともそのすべてが包含されるようにである。

111 ところで、「永遠な芸術ないしは現われ」*aeterna ars et apparitio* というあの「言葉」において、彼^(おろおろ)がわれわれを生んだのは、「無限な言葉」である彼^(おろおろ)の自己顕示の光 *lumen ostensionis eius* を、その下降において *in descensu*——しかも、それ^(おろおろの自己顕示の光)がこのような下降においてわれわれによって受け入れられうる最良の仕方で——われわれが受け入れる限りにおいて、《われわれが彼の被造物の「或る始まり」*initium aliquod* となるために》《*ut simus initium aliquod creaturae eius*》^{『ヤコボスの手』(紙)二の一八}であった。それゆえ、「言葉における父の自己顕示」*ostensio patris in verbo* がその下降において受け入れられることが、被造物に始まりを与える。なぜなら、彼^(おろおろ)が「真理の言葉」においてわれわれを生んだのであるから、この「真理の言葉」をわれわれの仕方でわれわれが受け入れるということによって、われわれは《彼の被造物の或る始まり》《*initium aliquod creaturae eius*》となるからである。^(おろおろの自己顕示の光)その下降において受け入れられることに起因して、永遠で普遍的な光 *aeternale lumen atque universale* が個別的な被造物の始まりとなり、その結果、「真理の言葉」において「原初的な或る始まり」*primitiale aliquod initium* を所有する被造物が出現すること、このことがこれまでのところで十分に示された。それゆえ、彼^(おろおろ)がわれわれを生んだがゆえに、われわれは神の種族 *genus dei* なのである。しかし、彼は、「真理の言葉」である「独り子」*unus filius* においてわれわれすべてを生み、この「独り子」においてわれわれに《彼の被造物の或る始まり》を所有させた。人間はすべて人間性という言葉すなわち概念 *ratio* ないしは芸術 *ars* において生み出されたが、それは、彼らが、「自分たちが個別的な人間であることの或る始まりであること」*quod sint initium aliquod essendi homines particulares* を人間性の生成によって受け入れることによる、という仕方によってであった。同時に、「真に存在しているもの」*id quod vere est* はどれも普遍的な真理の生成において生み出されたが、それは、「真に存在しているもの」のおのおのが「生み出す被造物」*creatura generans* の或る始まりになる、という仕方によってであった。したがって、存在しているものは何であれすべて、それらが真である限りにおいてのみ存在する。というのは、虚偽は存在しないからである。それゆえ、存在しているものはすべて真理の永遠な生成において永遠に生成されたのであ

り、この限りにおいて彼らは真理の永遠な力なのである。この「真理の永遠な力」*aeterna virtus veritatis* から彼らは、時間的な継起において現われる限り、生み出す父の《被造物の或る始まり》であること|を受け入れるのである。例えば、私はいま木の枝が木にのび始めた⁽⁸²⁾のを見ているが、この枝は以前に、子という種子においては枝ではなくて種子であったようにである。それゆえ、種子の真理は枝の真理である。それゆえ、力の真理は、存在することの或る始まりを受け入れるのである。「枝」を考えなさい。枝は種子のいわば被造物であり種子の力から進み出る。それゆえ、種子の真理の中に生み出されて常に種子と共にあった枝の真理は、いま現われて、自らの現われによって自分の父である種子の力を顕示するのである。

このようにわれわれは、どのような仕方でも「神的なものどもにおける子(子の第三)」が絶対的な全能であり無限な光 *lumen infinitum* である限りの父の真の顕示であるのか、を明らかに見るのである。しかし、被造物はすべて、父の顕示ではあるが、「子」の顕示をさまざまに、かつ、縮限された仕方でも *contracte* 分有するものなのである。しかも、或る被造物はより暗く、或る被造物はより明るく、「神の顕現」*theophaniae*、すなわち、「神の現われ」*apparitiones dei* の多様性に基づいて彼⁽⁷⁾を顕示する。

112 第五章

(⁸ある神の) 数ある照明の贈り物について、見のがせないもう一つのことをつけ加えたい。なぜなら、「一で神的な完成させる霊」*unus divinus perficiens spiritus* の贈り物はさまざまであるからである。

なぜなら、最も純粋な現実態自体である神は、無限な完全性でもあり、下降において、それがあるとおりにではなく可能的に受け入れられるからである。例えば、生成という下降において、人間の完全性が父から受け入れられるのではなく、父の種子において可能態にある人間が受け入れられるように、また、木から下降する果実において、木が受け入れられるのではなく(⁹)種子において可能態にある木が受け入れられるようにである。それゆえ、父が《真理の言葉》*verbum veritatis* において万物を生むように、万物は父と子から進み出る霊において完成される。なぜなら、霊は大地の球と万物を、「声の知識」を所有するものどもをも満たす、すなわち、それらを完成へと導くのである。

万物は|父において父的に存在し、万物は子において子的に存在し、万物は聖霊において⁽⁸³⁾「完成されるものとして」*perfectionaliter* 存在する。万物は父のうちに本質を、子のうちに可能性を、霊のうちに活動性を所有する。父である神は《万物において万物》*omnia in omnibus* であり、子である神は万物において万物であることが可能であり、霊である神は《万物において万物を活動させる》*operatur omnia in omnibus*。

113 さて活動は存在 *esse* と可能 *posse* とから進み出る。しかるに、霊は、存在する(¹⁰)ものどもにおいては存在自体を完成させるために、生命あるものどもにおいては生命を完成させるために、知解するものどもにおいては知を完成させるために活動する。それゆえ、これらすべての活動を賛美される神である一なる霊が行なうのは、すべての被造物が(¹¹)完成活動によって、自らの本性の制約が許す限りにおいて神化 *deificatio* へと、すなわち、「安らぎの極み」*quietis terminus* へと、いっそう近く上昇するためである。

影のある物的な存在は生命的な存在において安らぎ、生命的な存在は知性的な存在において安らぎ、知性的な存在は神であるところの真理において安らぐ。その結果、すべての物的な存在者は生きている存在者どもの媒介によって、生きている存在者どもは知性的な存在者ど

もの媒介によって根源（神）へと流帰する，ことになる。

114 さて，知性的な存在者どもは，より下位の存在者どもが神から流出し神自体へと流帰することの媒介である。したがって，数において「単純な数的下降自体」が「10」によって完成される（普通の図形における $1+2+3+4=10$ ）ように，知性的な本性自体は下降における受容に基づいてさまざまに段階づけられている。しかるに，十的な下降（降る）は合成される数の「始め」であり，単純な数（含められ）の「終り」であり，「第二の別な一性」である。それゆえ，知性的な本性の段階は十個存在し，その第一の段階は（影が）いっそう解き放されていてより明澄であり，「神を把握する」⁽⁸⁴⁾ ことの現実態において大である。その最終の段階は，物的な影の中に沈んでいて人間的な段階とも言われ，神を把握することの現実態においては最小であるが，その潜在的な可能性においては大である。

115 われわれの知性的な霊は，彼（神）を把捉するために知性的な存在を受け取ったがゆえに，その彼を自らの知性的な本性によって把捉する場合に限り安らぎに到達する。それゆえ，われわれの知性的な霊が自らの可能態の力から現実態へと進むことができるように，完成する霊 *spiritus perficiens* は彼に多くの光 *multa lumina* を与える。なぜなら，創造されたものはどれもみな，知性的な力を現実化するための或るもろもろの光 *lumina quaedam* であるからであり，このような仕方で自分に贈られた光 *lumen* の中で知性的な力は，このもろもろの光の源泉 *fons luminum* へと進んでいくことになる。人間は，さまざまな被造物が存在するのを見て，その多様性において照明されるが，それは，彼が被造物どもの本質的な光 *essentiale lumen creaturarum* へと進んで行くためなのである。

116 すなわち，或る被造物が生命的な運動なしに存在すること，或る被造物が生きていること，或る被造物が推論すること，これらのことを人間が見るとき，人間は直ちに照明されて，被造物どもの「絶対的な本質」*essentia absoluta* が具体的なこれこれのものとして存在したり，或いは生きていたり，或いは推論したりはしないことを知る。なぜなら，もし生命が被造物の（絶対的な）本質に属するならば，生きていないものは被造物ではなくなってしまうからであり，もし「推論すること」が被造物の本質に属するならば，石或いは木は被造物でなくなってしまうからである。それゆえ，もろもろの被造物の多様性において把捉されるものどものどれもが（被造物の絶対的な）本質に属していないことを，人間は知解する。それゆえ，被造物はすべて「縮限された仕方で」*contracte* 或るものであるが，万物の（絶対的な）本質は（縮限され）或るものであるのではなく，むしろ，「縮限されない仕方で」*incontracte* 万物のどれでもない。このように，あなたは形相どもの多様性を見る。それゆえ，万物の（絶対的な）本質はこのようなものどものどれでもない。

117 或る被造物どもは大きく，或るものどもは小さく，或るものどもは上位に存在し，或るものどもは下位に存在し，或るものどもは過去に存在していたし，或るものどもは未来に存在するであろうし，或るものどもはここに存在し，或るものどもは他の場所に存在し，等々と，すべての名付けられうる多様性について言われる。それゆえ（被造物の絶対的な）本質は，量的でもなく，大きくもなく，小さくもなく，場所における上位でも下位でもなく，時間における過去でも未来でもない，等々である。

多くの事物が元素的な類において合致し，多くの事物が植物的な類において合致し，多くの事物が感覚的な類において合致していて，これらの類が多様であることをあなたは見る。それ

ゆえ、^(被造物の)_(絶対的な)本質がこれらの類のどれかであることはない。

類どもの下位に多くのさまざまな種をあなたは見る、| 例えば、動物性という類のうちには人⁽⁸⁵⁾間的な種、獅子的な種、馬的な種、等々をあなたが見るようにである。それゆえ、動物性という類の^(絶対)本質は、万物の或る種ではなく、むしろ、万物のどの種でもない。

118 あなたは人びとが多様であるのを見る。或る人は過去に存在していたし、或る人は生まれようとしている。或る人は若く、或る人は老いている。或る人はドイツ人であり、或る人はフランス人である。或る人は男であり、或る人は女である。或る人は大きく、或る人は小さい。或る人は盲目であり、或る人は目が見える。或る人は白く、或る人は黒い。他のすべてについても同様である。なぜなら、考察の対象になりうるものすべてには多様性が存在するからである。それゆえ、感じられるもの、見られるもの、触れられるもの、等々はすべて、人間の本質に属していない。それゆえ、人間性は、どの人間においても把捉 *apprehendere* されうるものどもの中のどれでもない。むしろ、人間性は類的な本質を種的に受け入れるところの最も単純な本質であり *humanitas est essentia simplicissima, quae genericam essentiam specificè recipit*, その中に、人間どもの多様性において個的に分有されるあのものどもがすべて、ちょうど単純な力の中に存在するように、存在する。それゆえ人間性は「さまざまな人間の光^(人間の)」の父であり *humanitas igitur pater luminum hominum variorum est*, プラトンの同じ本質は、(1) 人間性においては、すべての感覚的な・時間的な所有態 *habitudo* を超えているが、(2) プラトンにおいては、感覚的な・時間的な所有態の中に在る。すべての人びとについても同様である。

したがって、可感的なものどもの本質は、感覚されえない仕方でもろもろの種のうち存在し、「種的な本質ども」*essentiae specificae* は、種化 *specificatio* を伴わないでもろもろの類のうち存在し、そしてもろもろの「類的な本質ども」*essentiae genericae* は、類性 *generalitas* を伴わないで「絶対的な本質」*essentia absoluta* の中に存在する。「絶対的な本質」とは、賛美される神である。

119 このほかにも、「神の照明」*divina illuminatio* によって注入されるもろもろの光 *lumina* がある。それは、知性的な可能態を完成へと導くものであり、信仰の光 *lumen fidei* がそうである。これによって知性は照明され、その結果、理性を超えて真理の把捉へと上昇することになる。知性は、この光 *lumen* ^(信仰の)に導かれて、いわば自分の道具である理性の助けによっては到達できない真理に自分が到達できるのだと信じるようになるがゆえに、理性という杖にたよって対抗していた弱さ、ないしは| 盲目を、知性は、自分に神から与えられた或る努力によ⁽⁸⁶⁾って捨てさり、信仰の言葉において自分だけで前進しうるように強められて、堅固な信仰によって約束されたもの——知性が愛の疾走によってすばやく把捉したもの——に到達できるという疑いのない希望によって導かれる。これが、ためらうことなく信じ請い求める者は英知を獲得するであろう、と告げている使徒^(使徒)の照明である。

120 たしかに、われわれの知性的な力は、光 *lux* という言表しえない富を可能態において所有している。この富は可能態にあるがゆえに、これをわれわれが所有していることをわれわれは知らないし、これが「現実態において存在している知性的な光」*lumen intellectuale in actu existens* によってわれわれの前にどれほどまで展げられるかをも、また、これを現実態へと引き出す仕方がどれほどまで示されるかをもわれわれは知らない。

このことは次のように喩えられる。或る貧しい農夫の小さな畑に、多くの富が可能態において存在している。もし農夫が、そこに富があることを知り、適当な仕方を探すならば、彼はそれを見出すはずである。つまり、そこには、農夫が希求しているが眼によっては見ていない羊毛、パン、ブドウ酒、肉類、等々が存在している。しかし、理性が農夫に「開示の光」*lumen revelationis* を与えるので、彼はそこにそれらがあることを知るに至り、小羊を飼って毛糸を、牝牛を飼って牛乳を、ブドウの樹を植えてブドウ酒を、こくもつを栽培してパンを取り出しうることを知るに至る。さらに、さまざまな経験豊かな農夫たちは、畑を良く耕作するための「学問の光」*lumen doctrinae* を互いに示し合う。これらの経験豊かな農夫たちが示す光 *lumen* の中で彼(農夫)は、信頼によって進み、感覚的な生命の果実を獲得する。

121 このような類似によれば、知性的な畑の可能態の中には、それが正しく耕されて、そのもろもろの力が至当な修練および方法によって押し出される限りにおいて、知性的な生命を保証するものどもすべてがある。それ(知性的)を耕作するためにわれわれに伝えられたさまざまな光は、この知的な耕作に熱心に励んだ人たちによって見出されている。それは、例えばモーシェ、予言者たち、哲学者たち、使徒的な人たちのように、もろもろの力を与えられ、この世の影を捨て去って精神的な光 *mentalis lux* に没頭している人たちのことである。彼らを介してもろもろの光 *lumina* の与え主は、隠されている宝を、畑と法律と掟を守る仕方を、生命の実をつくらずに実りを阻んで殺す有害な草を根こそぎにする仕方を、耕作する仕方を、生命の(87)木をそれ(知性的)に植える仕方をわれわれに開示したのである。

122 しかし、これらすべての人びとの言葉は、「絶対的な言葉の下降において受け入れられた光」*lumen receptum in descensu verbi absoluti* であり、(絶対)言葉自体が自らを縮限 *contractio* なしに可感的な仕方であれわれの主イエス・キリストにおいて示すまでは、「父の無限な光自体である(絶対)言葉自体」*ipsum verbum, quod est ipsum lumen infinitum patris* ではなかった。なぜなら、われわれは、この《真理の言葉(イエス・キリストにおいて)》《*verbum veritatis*》において光の子ら *filii lucis* として生み出されたからである。そのわけはこうである。

(1)《真理の言葉》は、永遠な王国の栄光の富がわれわれの中にそしてわれわれの内面にあることを啓示した。

(2)《真理の言葉》は、感覚的な世界を死に至らしめることによって知性的な不死を獲得することを教えた。

(3)《真理の言葉》は、《肉となった言葉(キリスト)》《*verbum caro factum*》である自らの光 *suum lumen* においてわれわれの生命の父的な光 *paternum lumen* をわれわれが把握するためにと、自分自身をわれわれにあらわにした。なぜなら、彼(キリスト)は《すべての人間を照明する》《*illuminans omnem hominem*》父的な光 *paternum lumen* であり、「世々に賛美される彼において、また、彼を介して、安らぎという最も喜ばしい生命を獲得するためにわれわれに欠けているもの」を自らの光 *suum lumen* によって補完するものであるからである。

注

- 93 《許す限りのいちばん善いやり方で》——《*meliori modo, quo……*》という定式。この定式について、Symposion des wissenschaftlichen Beirates der Cusanus-Gesellschaft (Am 1. April 1966)

(MFCG 6. S. 21-30) において Haubst 教授は «Wenn ich mich recht erinnere, ist mir auch bei Zeitgenossen des Nikolaus von Kues die Formel meliori quo possunt modo etc, öfter begegnet. Das scheint typisches Humanister-Latein zu sein mit dem Sinn: auf die bestmögliche Weise.» と述べている。また, Koch 教授も «Aber, das meliori meint tatsächlich die bestmögliche Weise» と述べている。それゆえ, 両教授の見解にしたがい, この定式を「…許す限りのいちばん善い仕方です」と訳する。なお, 同じ定式の用法は, 例えば Compendium 3, Capitulum II (ed, Bruno Decker und Karl Bormann, Felix Meiner, Hamburg) にもみられる。

1985年9月14日

この翻訳にあたり, 大出 哲・室蘭工業大学教授の御指導を仰ぎました。深く感謝を申し上げます。